Kappa Novels

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　神吉晴夫

長編小説　ゲリラの群（む）れ

昭和43年8月25日　初版発行

検印廃止　¥350

著者　野坂昭如（のさかあきゆき）
東京都練馬区豊玉上町2-19

発行者　神吉晴夫

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替東京115347　株式会社　光文社

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　〔製川製本〕
表紙の模様・意匠登録　116613
© Akiyuki Nosaka 1968

ゲリラの群(む)れ

野坂昭如(のさかあきゆき)

カッパ・ノベルス

目次

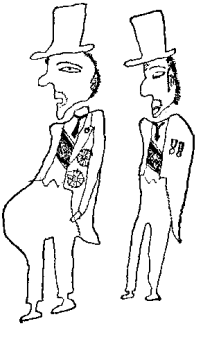
禅寺の隠密(おんみつ)会議 6
交通安全作戦 14
禅寺乗っ取り 22
温泉場の女子高応援部 30
オウム返し作戦 38
ニセ集金人出動 46
虱(しらみ)型人工衛星発射 54
カイカイ工作隊 62
視聴率マヌーバー賊 70
マス協会設立構想 78
コールガール予備軍 86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

忍法ユニスコープ　94
隠密製作陣の暗躍　102
聖母選出の水着コンテスト　110
聖なる女傑一代記　118
幻(まぼろし)の映画プロダクション　126
㊙馬券メーカー　134
ニューフェイス登場　142
ゲリラ大臣の視察旅行　150
ゲリラ党の組閣工作　158
ゲリラ内閣の芸者遊び　166
ナイチンゲール教縁起　174
秘伝お披露(ひろ)めの儀　182

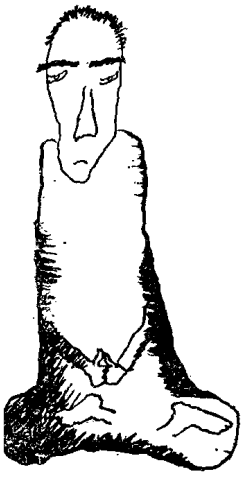
十律十流治療術 190
週刊『M自身』 198
付録・オナニー講座 206
瀬戸内の無人島 214
大レジャーランド構想 222
シェルター分譲 229
核アレルギー拡散作戦 236
兵庫県独立運動 243
オルグ活動開始 250
兵庫国解放戦線 258
兵庫国独立宣言 266

イラストレーション　永田力



禅寺の隠密会議

1



「目ェ ねむったらあかん、半眼に閉じて無念無想の境地、これすなわち禅定の要諦。円満安坐の相」

墨染の衣まとい、やたら背の高い坊主が妙な節まわしでがなり立て、ついうとうとしかけたカンパイ、あわてて鼻水すすり上げながら頭をたて直す。おびただしい蟬時雨が耳をうち、真夏の昼下がりとはいえ、木立ちにかこまれた寺の坐禅堂、荒壁くずれ、窓の障子すべて無惨に破れ果て、そこから吹きこむ涼風はそよろそよろと、まことに心地よく、尻の下になんやくくり枕みたいなんを置いて、窮屈な結跏趺坐、目下修行中の身の上もつい忘れ勝ち。どだい無念無想になれというたって無理な話で、昨日が偽造の手形の期日、今頃は天下茶屋の金貸し下三白の目ェむいてきりきり舞いしとるやろ、この道すでに八年、いまさら、脅えもせんが、濡手で粟の千二百万円、その大半はすでに雲散霧消したけど、あらためて、やったったアと実感が湧く。

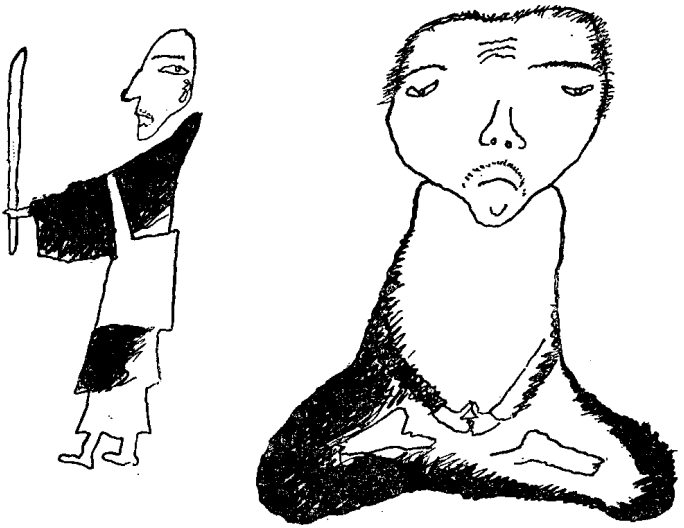
横目で右隣同じ姿勢の印鑑屋をうかがうと、なんや神妙な面、本気で坐禅しとるらしい、左のブックは虱たかりみたいにもぞもぞ体うごかせて、こら脚しびれたんや。

「どうせしばらくふけんならんねんやったら、この機会に禅をやらへんか」

三日前に印鑑屋が突拍子もないことをいい出し、

「禅てなんやねん」

「お寺さんでやな、修行するねん、そもそも」と、印鑑屋の説明では、わしは近頃、鏡をみるのが怖うなった。あんたら気ィついてないかも知れんけど、目つきがきつなって来たわ。わしら詐欺師は、目ェが勝負やで、いか



にも欺したろかという、すばしこい目では、誰もひっかからへん。なんやしらん一本抜けとるような、ぼさっとしとらなあかん、

「カンパイかてそやで、その目つきは桜印か井桁の方に似てきたわ、鳥打帽かぶって曾根崎いってみい、本庁のデカかおもて、制服が敬礼しよるで」

いまさら、印鑑屋にいわれるまでもない、こっちを欺しにかかろうとする欲張りを、逆にカモるのがなりわいであれば、ウエスト一米二十糎、パンツもでき合いでは間にあわぬカンパイのその肥満体も資本のうち、肥れや肥れ、目ざすは元エジプト国王ファルーク。桜印はお巡り、井桁すなわちこのあたりの暴力団のマークだから、

「いやらしこというな、俺の目はいかにも気弱そうで、お人好しにみえるて、女よういいよるで」

「前はたしかにそうや、そやけど今は鋭うなった、相手を見すえるような、こわい感じがチラチラする」

洋服は野暮ったく、言葉づかいはつとめてのろく、どもりさえ真似し、六月になってメリヤスのももひきをことさらちらつかせ、その実、生馬の目どころかキンタマも抜いたろかという正体おおいかくす算段も、心の窓に

鎧があらわれてはぶちこわし。かつて陸軍中野学校では、生徒達に、目を鋭くさせぬ訓練をほどこしたというが、わし等かて敵地に忍びこみ、搦め手から足をすくう点で同じ商売、こら考えなあかんと説明する。

「禅をやったら目ェがやさしなるんか」

「えらい坊さんみてみい、いかにも婆婆っ気ぬけてええ目ェしてるで」

「そやけどお前、仏さんそんなんに利用したら罰あたるで」

「かまへんよ、野球の監督かていきよるもん、おさい銭上げたらそれでええねん」

仏さんの方は御布施いうんちゃうか、カンパイちょいと文句をつけたが、印鑑屋の提案にそう反対する理由もない。

どうせ手形の期日の前に、温泉場へでも逃げこむつもり、偽造とわかって金貸しがいくら探索の手をひろげても、まさか禅寺とは気がつくまい、

「一人や二人やったら、途中でいやになるかも知れん、仲間みなつれて、いわば心の洗濯いうわけやな、心が清められれば、目ェもまた澄みやかになる」

あらためてカンパイ、トイレットのはしの欠けた鏡のぞきこむと、なるほどえらい濁ってる。しみじみ手前の顔をながめるなど何年ぶりのことか、よう肥って油切って、ふと思いつきニッコリいい顔をしてみたが、どうもわが面ながらたしかに陰険な感じ。いや印鑑屋も以前はひょろひょろ痩せてばかりおって、みるからに生活無能力の印象やったのが、年中小刻みの貧乏ゆすりまでが、今では獲物を狙う前の武者震いにみえるし、小柄で、手足は子供みたいに細いブックも、なんとなく小人のレスラーの如く、すきのない身のこなしがあらわれとる。

2

そもそも印鑑屋は、以前、西宮に店をかまえる由緒正しい印章屋で、それが野球賭博に身を持ちくずし、カンパイとの出会いは、天六裏の貸しデスク、たしかデパートから配達されたタオルの中元を、受けとろうとしたら印がない。拇印ではあかんといわれて押し問答しとったら、「これでどないです」かたわらでやりとりきいとったノッポのおっさんが、掌に名刺ほどの紙きれのせてさし出した。よくみるとこれが謄写板の原紙で、たちまちポケットから鉄筆をとり出し、灰皿の裏に原紙を置く

と、まず見事な楕円をちいさく切り、「お名前は？」「はあ吉兼です」「ヨシは大吉の吉、カネは兼ねるの兼」とあらためて問い質し、けっこう字画の多い字ィやのに、その円の中に鉄筆をきしらせ、「どこに押しますねん」配達から領収の紙うけとると、原紙を置き、朱肉に指をふれ、ちょいちょいとその上をこする。なんのことはない、一種のこれも謄写印刷、見事に印が押され、「そんなん困ります」配達の文句には、「あんたはん印ということのは、印こ自体なんでもえぇねん。押されたこの形に責任が生まれるんでっせ、嘘やいうねんやったら、役所行ってきいてきてみい」自信たっぷりに断言した。

えらい器用な人やとカンパイ感じ入って、そらまあ印章一切は商売柄やが、たとえばクリップ、これを暇にまかせて伸ばしてしまう人はようけおるけど、印鑑屋は逆に針金を上手に曲げて、クリップつくりよるし、ホッチキスのタマかてお手のもの、まあ、ホッチキスのタマつくれたってどういうことないみたいやけど、他人にわたす書類を、こよりでとめるよりは、きりで穴をあけ、コの字型の針金でとじた方が、箔がつく、いかにも近代的なビジネスやっとるようにみえま。

一事が万事、なにごとにも目がとどく男、これをきっかけにつきあい始め、お互い人の通る裏にこそ花が咲くと信じこんだ同士、特にその印章技術は貴重な財産、なんせ銀行でさえごま化されてしまうような、一流会社の実印を朝飯前のトーストホンでつくるのやから。

ブックは釜ケ崎の近くに、六畳一間借りて、電話一本と、仰々しい挨拶状がたよりの豪華本屋、つまり、文化人、知識人に電話かけて、

「こちらは重症身体障害児救済同盟であります。恵まれぬ子等のために、このたび豪華保存用平家物語二巻を出版いたしました。上下で、五千円、この中から、かわいそうな子供の、冬のあかぎれ、夏の虫さされ、少しでも楽にさせてやろうという趣旨でございます。おって参上いたさせていただきますから、一度、手にとって見て下さって、なるほどと納得がいきましたら、お買い上げいただきとう存じます」まことにもって丁重におねがいをする。

三人に一人はいうまま、みてくれは豪華やけれども、じっくり頁をめくられたらバラバラになってしまう豪華本、まあ、著作権のない古典が主やから、文化人いうても、平家、伊勢、栄花などの物語、読む気づかいはない、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

バレやせぬ。原価が千円、なるべく実直そうな学生アルバイトを運び屋に雇ってこれに千円、二日に一冊売れたら、せいぜいアパートの窓辺に万年青を置いて、これの手入れが楽しみのブック、御の字でめしが喰える勘定。

知り合ったのは、天王寺の飯屋、人相風態に似合わぬむずかしい本を、乱暴にとり扱うとこわれてしまうから、そろりそろりと頁めくって、読むともなくながめるその姿、周囲はアンコ、拾い屋ばかりの中でいかにも場ちがいな感じ、「おたく、そういうむずかしい本わかりはりますの？」旧制の中学中退で、やや知的なものに憧れのつよいカンパイたずねると、テキはにやりと笑って、

「どや、暇やったら商売せぇへんか、足運ぶだけで千円なるで」

ブックがすぐに話もちかけたのは、カンパイの、当時は人の好さそうな、気弱そうな、細い目ェに安心したからであろう。

「よっしゃ、坐禅いうのやってみよやないか」話まとまって、なにか要るとなったら、たとえば今日只今フラフープを百欲しいいわれたって、すぐに探し出してくるカンパイ、大阪市の教育委員会に電話をかけ、「生徒の精神修養のため参禅したい。ついては、適当なお寺さん紹介してもらえませんやろか」たずねたら、たちまち生駒の麓の大王寺にコネがつき、それぞれ職業別電話帳にはのってない仲間の面々総勢七人、いずれも親が頭をひねり、心をこめてつけてくれた名前名のるのは、まあ死亡届の時くらい、もっぱら通称で世をまかり通る面々、結跏趺坐の仕儀と相成る。

二時間の参禅が終わると本堂へ通され背の高い坊主が茶を運ぶ、これがまた馬鹿っ丁寧なお辞儀をするから、一同もこれにならって床に額こすりつけ、

「なるほど、このお辞儀はよろしいな、なんやしらん実直そうにみえるわ」ブックが感心し、だがこの坊主色浅黒く眉毛は入墨したみたいに輪郭がはっきりしていて、

「何年修行積んだんかしらんけど、あのおっさんの目ェ怖いやんけ」

カンパイは、やや不服そうにいい、やがてあらわれた和尚、説教というのか法話というのか、「汽車の中で、人の食べ残した弁当殻を拾い、一粒残さず食べた高僧の話」やら「本山の建物は宏壮で、電気の数が五千八百二十六球もあり、廊下の延長距離九里と六丁八間」やら、くだらん話を重々しい口調でのべたて、これには担保屋

が感心した。

彼は、どうたたき売っても十万にもならぬ山林の権利書を、それこそ一山なんぼと計り売りするくらい持っていて、金を借りたい奴の、その担保に売る、権利書の字面に一言一句のまちがいもないが、実はその山林、崩すも埋めるもならぬ断崖絶壁奇岩怪石であったり、土産物よろしく、人が歩いて入るくらいのところまでは樹が生えているけれどもまん中は丸坊主のあげ底だったり、

「いや、あの坊さんこんなとこに置いとくの惜しいで、あれだけ弁が立ったら、たいていの奴イチコロでひっかかりよるわ」

各人各様に業を修め、まあ修めずとも、涼しい風に当たって、本堂の縁側で昼寝、広い庭には結構な立ち木があるし、小鳥の声やら蟬時雨、浮き世の馬鹿は起きて働く的心境、「あの金貸し、今頃どないしとるやろ」

3

街にはようけ欲張りがおるもので、アルサロやパチンコ屋で稼いだ金を、銀行へ預けるのも馬鹿臭いと、まず考えるのが、絶対に確実な手形の買い入れ。これをカモるには、はじめの二カ月ほどは一流会社の本物つかませて信用をつけ、ほどよきところで、印鑑屋が実印を偽造し、どんと高額の手形を造る。

「そんな高いもん、とてもうちらではよう買えんで」

さすがに二の足踏むのを、そのままとり逃がしてはこれまでの足代手間代、それに割引き料損してまう、ここぞ福徳円満な体つきと目ェにものいわして、

「そうでございますか、実に残念ですなあ、いやこういうたらなんですけど、私かてお金さえあれば自分でやりたいですわ、額面千八百万が千五百万、三月寝かせるだけで三百万もうかるんですからなあ、親戚かけまわっても、ちょっとこれは無理やし、まあせめて三百万くらいやったら」いかにもこちらが欲で疼いとるようなしゃべりをするうち、たいてい欲が欲を呼ぶというのか、「わしは無理やが、知っとるのにきいたろか」とか「あんた三百万出せるんやったら、わしが千二百万で、相乗りしようか」段々に心がうごき始めるのを、とにかく二、三日後で、もう一度うかがいますと、余韻を残して引き下がる、この間に偽造手形について調べられたら一巻の終わりだが、といって、押せ押せムードで即戦即決も怪しまれる、放った屁ェさえわが畑の上にはこんで、ただの

神風よりはこやしになるやろと考える欲張り、その鼻面つかまえて引きまわす手練手管はしんどいもので、ふとしたときにも、こちらの正体みすかされてしまう。

あらためて参上すると、金を出す気配ありありとみえとるのに、まだ天気の話やトルコ風呂の噂、ねちねちとねばって、挙句の果てに、便所へでも立つ風で、ひょいと立ち上がる、天下茶屋のカモは別室の箪笥に現金を入れとったようで、さすが手がふるえるのか、引き出しの環がカチカチひびき、えらい乱暴にあけたてする、その表情襖越しにありありと浮かび、カンパイの背筋ジーンと、オリンピックの開会式をTVで観た時のようなしびれが走り、だがうわべはそ知らぬ顔、どころか、金のある奴はさらにふとるばかり、みすみす三月で三百万、月に百万を人にもうけさす恨み、口惜しさ、目ぎらぎら、顔面蒼白を演技して、手形一枚と千五百万、新札やったらほんの十二、三糎ほどの厚みのそれ、銀行の封印たしかめ鞄におさめる。

「まあ、気イつけてかえりや、そやな、どっかで飯でもおごろか」カモはカモで、印鑑屋苦心の実印にすっかり安心し切り、柄にもないことというのを、

「いえ、こういう持ちなれぬものを持ちますと、とても食欲まで手がまわりません」気弱にふと笑い、失礼しますと後ろ手に戸を閉めて、後は野となれ山となれ、期日までに、さらにぶちこんで、総計四千万を手中におさめ、費用さっぴいた純益はカンパイの取り分が千二百万。こっちは風よ吹け小鳥よ唄えの心境でうたたねしとるが、天下茶屋はさぞかし修羅場であろう、そっけなく銀行からつっかえされ、いくら実印そっくりでも手形の通しナンバーがちがうから、あきらかなインチキ、といってうっかり訴えたら脱税でやられる、利子法違反もバレてしまう、暴力団に頼んでみても、さらにしぼられるだけで、なにしろ金を渡したのが三月近く前なのだから、今さらとっつかまえたところで、金とりかえせるわけがないと、こらアホかてわかる道理、まず泣き寝入りがこれまでの常であった。

「いや、こういう寺というのも、近頃はとんと不景気でしてな、歴史由緒はあっても、見世物にする仏も庭もなければ、とても檀家だけではやっていけません」

前もってたっぷり包んだお布施に心ひかれたのか、生来なのか、夕飯の席で和尚ものほしげに貧乏ぶりを愚痴って、なるほど庭も広ければ構えも立派だが、どことなく荒れ果てたたたずまい、納骨堂を探検してきた一人が、

「えらいもんやな、仏さんの絵描いた軸の前に、一円玉が十二、三個置いてあったわ。あれがおさい銭なんやろか」
　といっていたが、河内一帯のケチな土地柄では、葬式でも出んことには、寺に寄進など、思いも及ぶまい。
「テラステルいうて、ようお寺さんで旅館やりはるいうけど、こんな田舎やったら泊まり客もおるわけないし」
　印鑑屋、和尚がひっこんでからも、真剣にこの寺の行く末案じる風やから、
「もう寝よやないか、ここらへん按摩おらんやろか、坐禅のせいか、脚のふくらはぎが痛うて」
　カンパイさっさと本堂に敷かれた、いかにも堅そうな布団の方へ歩きかけると、
「どや、この寺モノになるのちゃうか」
「モノにいうて、こんな貧乏なとこ」
「担保にするいうたって、まさかお寺の権利書売るわけにもいかんし」
「お寺の縁起を本にして檀家に押しつけたらどないや」
　もともと坐禅よりは一山当てたい連中ばかり、口々にいいつのり、もうこうなってはなんのための参禅か、うすぐらい本堂の、木魚横にのけてそのやわらかい布団にすわったり、さすがたたきもならぬから、鉦を爪ではじいたり、香炉は灰皿がわりとなって、目ェひからせた七人、そのまん中に印鑑屋すわって、
「なんせもうちょっと考えてやな、折角来てんから、只でかえるのもつまらんやろ」
　ぴしゃりと蚊をつぶしながらいい、なんせブツはあるねんからと、黒光りのする御本尊の半眼に閉じていかにも無念無想の境地、円満安坐の、そのでかい面を指さした。

交通安全作戦

1

ざっと見渡したところ二千坪ばかり、本堂の前庭夏草しげる片隅の、古井戸へたらい持ち出し、こうみえてもカンパイきれい好きで、男やもめに蛆もわかさず、掃除洗濯はお手のもの。

というのも、生まれは神戸、父親が外国航路の事務長で、その留守勝ちのせいだか、母親はおっそろしいカン性、年中長火鉢の猫板から障子の桟をからぶきし、そして銅壺からはいつも中将湯の臭いが立ちのぼっていた。

父親はトラック島で死に、母一人子一人のまま中学を中退、年とるにつれてますます気むずかしくなる母親から、ただもう逃げ出したい一心で、元町の繊維問屋の経理係、薄給の身のほど知らずな結婚したのが、二十二歳の春、須磨に部屋を借りたのだが、おそろしいもので、母親から受けついだのか、習い性となったのか、新婚早早から目につくのは、女房のだらしのなさ、清潔整頓てんから気にしないそのぐうたらな暮らしぶり。

「あんなあ、ほうきで掃いてすぐふき掃除したってな、空中に浮かんどるゴミが落ちてくるからなんにもならへん、少し間ア置いてからせな」

「鏡台いうたら、女の心みたいなもんやで、きちんと、いつもしとかなみっともない」

いやはやお姑さんのいうようなことを、西陽が当たって夏はカンカン照り、冬はすき間風吹きこむ六畳一間の侘び住まい、ごちゃごちゃいうから嫁はんもたまらず、やがて箸のあげおろしさえ喧嘩のタネ。

今のカンパイやったらそこはお手のもので、うまいこといいくるめ、さっさと逃げ出したろうけど、当時は純

情で、いったいどないしたら、俺もこれほどきろうとると女房にわからせることができるやろ、考えた末に、同じ寝床にそいぶししながら、女房には指一本ふれず、あてがきをみせつけ、現在、女房がありながら一掌もって処理するのだから、いくらかは骨身にこたえたやろと思えば、なんのことはないテキも同じく、なにやら指づかいして息を荒らげ、となると閉口するのはカンパイの方で、うまいこといかん。

「別れるのやったら、なんぼでも別れたげます、そやけど一生食べられるだけのことしていただかんと、なんせキズモノでっさかいに」

下三白の目ェでじろりとにらみながらいい、えいもうこいつと別れるためならばと、六甲の母親の家を抵当に入れて金をつくり、仲間とかたらって繊維ブローカーをはじめ、ものの半年経たぬうち、まんまとだまされて借金が二千八百万、となったら女房さっさと逃げ出して、たしかに別れる目的は果たしたが、老い先みじかい母のもとへ暴力団まがいのとり立て屋が押しかける。ふつうの男やったら、二千八百万貯めたらまあ成功者の部類やろうに、こっちはそこまでいってようやく裸一貫とは、考えれば考えるほど情けなかったが、一方だまされるく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong